

カッパとシマフクロウの チャランケ



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレイ国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレイ校)通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

アイヌ民族の
伝承では、天の
川のどこかに人
生を全うした人
が死ぬと帰って
ゆくところがあ
るそうです。そ
して、人の魂は

生まれ変わるためにその場所から再び地上に戻ってきます。そのときウワリカムイ(u-互いに(母子のこと) a-座る re-させる kamuy-神)というお産の神様が道案内のためその人の魂に付き添ってきます。この神様はその魂を母親のお腹におさめ、成長が順調なのを見届け、出産後、産後の肥立ちを確かめると天上界に戻っていきます。万が一子どもが出産で亡くなってしまった場合には、父親はウワリカムイに、妻が再び妊娠できるようになるまでの間は、子どもの魂を連れてこの世を見せて楽しませ、再びその魂を胎内に戻して欲しい、などと願うのです。また、子どもの誕生に際しては、ウワリカムイとは別に、一生を通じてその子を守るトゥレンカムイ(turen-憑いている kamuy-神)と呼ばれる憑神も一緒にやってきます。この神様は、人が死ぬまで連れ添い、その人が亡くなると共に天上界に帰着するとそこでお別れします。女性には男性、男性には女性の憑神がつくのだそうです。憑神の正体はさまざまで、始祖神であることもあり、自然界の生物や自然神などであることもあります。また、子どもが誕生する際には男系、女系の先祖が相談し、それぞれに属する魂の中から候補者を選出し、前世の評価をし合って、どちらを誕生させるかを決めます。女の子しか生まれない場合は、男系の先祖に優れたものがいないからということになります。時には対等の状態と判断され、双子ということもあり得ます。

さて、憑神ですが、憑神が何者であるかによって結果が大きく異なることがあります。現在の釧路市浦見町は、アイヌ時代はウラリマイ(urar-霧 oma-そこにある i-ところ)という場所で、かつてコタンが

ありました。そこ
に和名は浦見琢
蔵、アイヌ名ラミ
タッエカシ(ram
-心で itak-話す
ekasi-長老)ま
たはラミタカイヌ
(ram-心で itak

-話す aynu-人)と呼ばれた人がいました。あるとき、ラミタッエカシは釧路川を遡り美幌峠を越え、阿寒湖に至りましたが、そこで美幌から来たアイヌとささいなことで口論のあげくチャランケで決着をつけることになりました。チャランケとはアイヌ式の討論による紛争解決方法です。チャランケの当事者は、自分の主張を節に乗せて発言し、場合によっては弁護人が代行や補佐をすることがあります。その雄弁な討論は、アイヌ社会では一種の娯楽のようにも考えられていました。チャランケがあるという、ニュースはまたたく間に地域に広がり、人々は食料持参で山越えをしても見物に出かけたそうです。紛争の当事者同士は自分がどのくらいの知識があるかを披露しなければならないため、博識かつ弁舌に優れている必要がありました。その論法は、ウチャシクマという先祖からの言い伝えである故事来歴談を引用して自分の主張の根拠としたので、より多くの言い伝えを知っているほうが有利になります。ラミタッエカシのチャランケは六日六晩延々と続き、勝利を収めたのはラミタッエカシでした。というのは、ラミタッエカシの憑神はシマフクロウの神(コタンコロカムイ)で、美幌の人の憑神はカッパ(ミントウチ)だったからです。シマフクロウは夜行性のため夜に強く、カッパはお皿の水が無くなると元気を失います。チャランケがあまりに長く続いたため、カッパのお皿の水が無くなり、美幌のアイヌはついに力尽きて後方へ仰向けにひっくり返ってしまったそうです(アイヌ語ではマカオクシ、maka-後ろへ okus-倒れる)。このお話は実話として伝えられています。



*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び、実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和4年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~14』(北海道教育委員会、2008~2023年)等。